

平成 27 年度 卒業論文

太白山に関する伝承・昔話と現在

尚絅学院大学
総合人間科学部 表現文化学科
氏名 柴田智慧子

タイトル 太白山に関する伝承・昔話と現在

目次

序章 研究の動機と目的

第1章 先行研究と問題

1節 山における民話研究

2節 太白山における伝承・昔話についての研究

3節 本研究の意義

第2章 太白山について

1節 地理的概要

2節 歴史的変遷

3節 二つの神社と祭

第3章 太白山の伝承と昔話

1節 太白山誕生（形成）についての伝説

2節 蛇に関する伝説

3節 独活に関する伝説

4節 太白山の大男

5節 生出が森の狐

6節 昔話 殿様と太白山

第4章 近年の変化―聞き取り調査から

1節 聞き取り調査の概要

2節 聞き取り 1

3節 聞き取り 2

結論

序章 研究の目的と動機

日本列島には数多くの山がある。各地の山々は、信仰やそれについての伝説などという形で、人々の暮らしや文化に深く関わってきた。山岳信仰から思想や祭り、演劇など多様な文化が形作られてきた。その中で本論では民間伝承を取り上げる。

民間伝承は生活文化に深くかかわるものであり、有名なものは柳田國男の『遠野物語』がある。その中には早池峰山、六角牛山、岩上山からなる遠野三山に関する伝承がいくつもあり、現在に至るまで伝えられ、生活に深く根付いている。[柳田 2004]

では、自分たちの身近にある山々にはそれらの信仰や伝承が生活に関わるものはないのだろうか。仙台市内には複数の山々があるが、仙台市内の区名に使われているのは青葉山の青葉区、泉ヶ岳の泉区、太白山の太白区と五つの区のうち三つの区が当てはまる。つまり、東部の三区はすべて山の名前がついている。本論では、この三つの山のうち太白山を主題に取り上げる。

太白山は区名にもなるように太白区を象徴する山であり、形も独特なもので、絵にかいたような山と呼ばれるくらいのきれいな三角形の形をした山である。山には二つの神社が祀っており頂上には貴船神社、中腹には生出森八幡神社がある。太白山にまつわる伝承の中には二つの神社に関係するものや、太白山の名前の由来など複数の伝承がある。本論ではそれらの伝承や昔話がどれほどあるのか、また現代ではどのように伝えられているのかを生出森八幡神社の里宮がある茂庭に焦点をあてて調査する。

茂庭には生出森八幡神社の里宮があり昔から正月は山の嶽宮、春の例大祭は里宮と嶽宮二カ所で行う、茂庭には六つの部落があり折立、梨野、本郷、上町、赤石、人來田が大例祭の際神輿を担ぐので太白山に関わることが他の地域よりも多い。そのため伝承や太白山からなる独特の習慣などがあると考えた。

また生出森八幡神社には神楽があり、現在も活動を行っている。そこで茂庭に伝わる民俗学の一つとして民間にどのように扱われ、現在どのように伝わっているのか比較する対象になる可能性もあるため、生出森八幡神社神楽についても述べていく。

第1章 先行研究と問題

1節 山における民話研究

山は人の生活の一部であり、また信仰の対象になっていた。それについて鈴木正崇は、次のように述べている。

日本の国土の四分の三は山であるという。そのため山は日々の暮らしの中に溶け

込んでいた。日本列島で生活する人々の精神文化を育んできたのは変化に富む山である。その中核にあったのが山を崇拝対象とする山岳信仰で、山を崇拝対象とする山岳信仰で、山に対して畏敬の念を抱き、神聖化して崇拝し儀礼を執行する信仰形態をいう。山を祀り、登拝して祈願し、祭祀芸能を奉納した。(鈴木 2015 : 3)

鈴木も指摘するように、人々の精神文化の根底には山岳信仰が流れている。そして山岳信仰による祭祀芸能から、神楽や能などの芸能や音楽、美術など様々な分野が発展した。また思考や哲学にも山岳信仰の影響がみられる、それが顕著に表れているのが山に関する民話に見られる。

民話とは民間に口伝えで伝えられた昔話や伝説である。山に関する民話は全国に存在する。各地の山々にはそれぞれ独自に語られている話もあれば、特徴が類似するものも複数存在する。有名なものでは柳田國男の『遠野物語』があげられるだろう。『遠野物語』内では早池峰山、六角牛山、岩上山からなる遠野三山の物語がいくつか掲載されている。

ところで山の民話にはいくつか種類がある。山の誕生、山自体が意思を持ち何かしているもの、山に天狗などの人ならざる者がいる話、偉人・村人が関わる話など多数ある。

例えば一つ山に絞って、その山に関する民話を調べ上げるものと、山に関わるものに絞って調べることもある。岩科小一郎著の『山の民話』内では天狗に焦点をあてたものがある。その中には天狗に関する住処や行動、地名を各地の山から集めたものが書かれている。また天狗についての文献を江戸期までの物を調べている。

こうした民話研究においては、対象を一つの民話に絞り込み、類似する話がある場合年代別に揃え、どの部分が違うのか、どうして違う部分ができたのか挿入あるいは欠損部分に着目し、考察する。また類似する民話と見比べて、時代背景や意図を探ることもする。この場合現代ではどれが原話か確定できないことがある。

また富士山のかぐや姫の話について調べ上げるものもある。鈴木正崇著の『山岳信仰』の中には本地垂迹^{ほんちすいじやく}¹の思考が展開しているという点に着目し、それら関連する文

¹ 本地垂迹とは、本体たる仏菩薩（本地）が衆生済度のために、仮に神のすがたとなって現れたものだとする説で、垂迹とは「迹を垂れる」という意味である、また、そのような神を「権現」ともよんだ、これは「権^かりに現れた者」という意味である。(池田 2012 : 315)

献にあるかぐや姫について述べている。富士の本地は大日如来、垂迹は浅間菩薩とされ、富士山縁起によれば赫夜姫と結びついていたという（鈴木 2015 : 3）

そこから十三世紀の『浅間大菩薩縁起』や室町時代の文献『浅間御本地御由来記』から赫夜姫とは何者であったかを文献から読み、そこから富士山の富士信仰に至るまでを探っている。

多くの民話研究は過去の資料や地元の語り部の方から話を聞くことで始まり、現地調査や歴史を調査することが主となる。では、本論が対象とする太白山の場合ほどのような研究がされてきたのだろうか。

2節 太白山における伝承・昔話についての研究

管見の限り、太白山における伝承や昔話の研究は論文等にされているものがない。太白山に関しては独特の地層や生息する蝶についての論文などは見られるが、太白山の信仰や伝承などの民俗学的な観点からの論文は見つけられなかった。

仙台市史などの仙台市に纏わる資料の中には太白山の伝承についてはいくつか描かれているが、その多くは太白山と名づけられた経緯についての話である。話の中に伊達家関わっていることが他の伝承よりも書籍に掲載された原因ではないかと考える。

また、茂庭地区の祭りや生出八幡神社の祭りの調査報告の中で、少し太白山の伝承についても触れられる。しかし、あくまで祭りがおこなわれる山についてなので、山の誕生と名称、名付けられた経緯や神社が祀られた経緯が載せられる。他にも片目の神様や大男の話もあるものもあるが、どれも一ページほどのもので、掘り下げて調査している、というものではない。

もっとも詳しく太白山の伝承・昔話について書かれているものは、生出森八幡神社の里宮がある、茂庭の生出市民センターが制作した小冊子『おいで』である。その中には茂庭地域に伝わっている太白山の伝承・昔話を現在も詳しく知っている方から聞き取り、まとめ文章化したものが掲載されている。しかし、近年これらの話がどのように伝わっているのか、いないのかといったことについては触れられていない。

3節 本研究の意義

民間伝承は土地独自の文化と生活に深く関わり、生活文化とも密接に関わるものである。しかし現代では、都市化が進み農村は少子高齢化が進んでいる、そのため古くからの伝統や習慣が消滅してきている。仙台市は都市としてのイメージが強い街ではあるが、一方で仙台市街を少し進むと、同じ仙台市でも山に囲まれた土地も仙台市内

にはある。

本研究では仙台市内にある名のある山の中から、区名ともなっている太白山に纏わる、民間伝承の一つである口伝えでの民話が現在、どのような形でその土地に伝えられているのかを調査によって明らかにする。それによって、現在の仙台市内の民俗がどのような状態であるかを示すことができると考える。民間伝承で有名な岩手県の遠野や、町の中にある伝承や昔話など多く着目される機会のある民間伝承とは別に、その土地でのみ語りつがれてきた民話が今後どのように語られていくのかが分かる。

また同じ土地に伝わる、同じ民間伝承である神楽という芸能がどのように伝わり今後どのように伝えていこうとされているのか、比較することで現在の民話のあり方が示すことができると考えた。

第2章 太白山について

1節 地理的概要

太白山は宮城県仙台市太白区にある茂庭生出森にある標高 320.61 メートルの山である。登山道の入り口は茂庭台入り口と人來団地入り口、佐保山団地入り口の系三カ所ある。東側の山麓には仙台市が管理する太白山自然観察の森という施設がある。

太白山は約 800 万年前から 500 万年前にマグマ活動によって形成されたものである。太白山の周りの丘陵地帯は砂岩や泥岩からなる旗立層である。太白山本体近くは軽石を含み凝灰石からなり梨野層と呼ばれている。太白山本体は安山岩からできている。また、太白区という区名の由来にもなっている。

2節 歴史的変遷

約 800 万年前から 500 万年前火山活動のマグマにより、山が形成される。特徴的な山の形から昔から信仰の対象にされてきたと考えられる。

太白山は神体山(神奈備)ともされてきた。神奈備の特徴は独立峰の山で富士山型、また岩山であることが多い。神奈備には磐座(神様の椅子)、神籬(大木)、磐境のどれか一つがないと、神奈備にはなれない、それらは依代といわれる。神奈備として、富士山筑波山に次ぐ理想的な形の山が太白山であり。有名な



写真 1 茂庭から見た太白山

2015 年 10 月 24 日撮影 柴田智慧子

ものは万葉集には奈良の三輪山が神奈備として出てくる。太白山には神社ができる前から神様が居るものとされてきた。

平安時代初期の大同 2 年（807 年）¹には山頂に貴船神社が祀られ、奥州合戦最中の文治 5 年（1189 年）には源頼朝が鶴岡八幡宮勧請した生出森八幡神社（岳宮、里宮）も鎮座することとなる。

太白山は「生出山」や「生出が森（おどがもり）」、「名取富士」などとも呼ばれていたが、仙台藩、伊達政宗の時代に「太白山」と命名される。

2010 年段階で茂庭地区は人口 2,555 人である、近くには茂庭浄水場がある。仙台で一番大きな浄水場がありおもに宮城野区・若林区・太白区に水道水を送っている。茂庭には六つの部落があり折立、梨野、本郷、上町、赤石、人來田がある。

茂庭の歴史は縄文時代まで遡る。茂庭地域には竪穴式住居をはじめ、煮炊きなどの料理や土器を作るのに使われた炉のある集落跡の他、丘陵地には動物の狩猟用とみられる落とし穴の跡があり、名取川段丘にはでは魚釣り用の土製のおもりが出土するなど、地区全体から当時の暮らしが偲ばれる貴重な遺跡が多く見つかっている。明治二二年町村制施行により、同じ名取郡であった茂庭村と坪沼村が合併して「生出村」が生まれた。「生出」という名前は、太白山の別称「生出森」より命名された。

他にも「オトアの森」などいくつかの言い伝えもあるが、いずれにしても、地域のシンボルである山の名を使い、親しみを込めて名付けたのだろう。

また、命名にあたっては、名取川を境に北方と南方に分かれていた二村が融和し一つになるという意味で、生出に込められた思いはまさしく「新しく生まれ出ずる村」だった。

当時、街道以外は荒れ地の多い未開の地で、道らしい道もなかった。わずかな開拓地での農業もたびたび冷害に襲われ、人々の暮らしは貧しかったという。この村の救世主となったのが、初代村長に就いた長尾四郎右衛門その人だった。山の多い生出の地域に適した桑を育て、新しい産業として養蚕を奨励した。村営製紙工場を建てる一方、村民には儉約と貯蓄を勧め、基本財産を蓄えることを村の政策として発展に尽くした。村が出来た頃は、農業と炭焼きなどに暮しの糧を求める自給自足の村だったが、一〇年後に村の歳入は倍増。生出村は「日本三大模範村」として注目を集め、日本中から村おこしの手本とされた。新時代の幕が開け近代化の波が押し寄せた時代、生出村の村人たちは村長を中心に果敢に村づくりに励み、輝かしい歴史を気づいた。

しかし昭和に入ると、時代の流れとともに生出村を救った養蚕業も縮小に転じ、戦

争も経て、昭和三一年、生出村は仙台市との合併を決断。村の名前はなくなった。[生出まち物語作成委員会 2013 : 4 f]

3 節 二つの神社と祭り

太白山には二つの神社がまつられている。頂上に貴船神社、中腹に生出森八幡神社がある。

頂上にある貴船神社の総本社は京都府京都市左京区にある神社である。式内社（名神大社）、二十二社（下八社）の一社である。水神である高たか竈おかみのかみ神を祀り、古くから祈雨の神として信仰された。

太白山にある貴船神社は、大同 2 年(807 年)²に豊作を願った村人たちが神の化身である独活の大木を切り倒すために、京都から分霊を移したといわれている。

文治 5 年（1189 年）には源頼朝が藤原泰衡を攻め滅ぼすために藤原氏の守護神である鎌倉の鶴岡八幡宮の分霊を移した。寛永（1624～）のころ、山そのものを総称した生出森八幡神社を嶽宮とし、元禄（1688～）になって拝殿（里宮）を茂庭に移している。[相原豊治 1991 : 23]

周知の通り、鶴岡八幡宮は鎌倉武士の守護神であり、鎌倉初代将軍源頼朝ゆかりの神社として全国の八幡社の中では知名度が高い。応神天皇（第 15 代天皇）、比売神、神功皇后（第 14 代仲哀天皇の妃、応神天皇の母）を祀っている。

生出森八幡神社では毎年、5 月の第 3 土・日、太白山麓にある生出森八幡神社嶽宮の例大祭が行われる。奉納神楽には明治 27 年（1894 年）から奉納されている「生出森八幡神社附属神楽」を見ることができる。現在は東日本大震災により嶽宮に向かう参道の石垣や石段が被害を受け、危険な状態にあるので行われていない。

里宮でも 4 月の第 3 土・日曜日に神輿譲渡と神楽奉納が見られる。神輿譲渡では里

² 大同 2 年は征夷大將軍である坂上田村麻呂が悪路王と呼ばれている夷大墓公阿弋流為を打ち破った年と言われている。この年はヤマト王権による蝦夷討伐語りに欠かせない年号であった。東北には坂上田村麻呂が創建になるという神社は五十以上、再興・修理などの関わりを含めると数えられないほど存在する。こうした東北の古い神社は大同 2 年の創建であるとされることが多い。また、田村麻呂との由緒を説かぬ神社までもが大同 2 年創建とされる場合すらある。このこうした神社が大同 2 年に創建されたという話自体は、事実でない確率が高いが、東北地方の宗教史を考える上で大変興味深い事象である。（赤坂 2009 : 91-104）

宮の町内（茂庭地区）を回る。途中で太白山にある嶽宮にも行き、最後は名取川で神輿を清める。二日目は生出森八幡神社附属神楽による神楽奉納である。神楽は境内にある神楽舞台の上でとり行われる。また、太白山には古くから白蛇神社信仰もある。

生出森八幡神社神楽について

生出森八幡神楽は全部で 14 の舞から成るものである。この神楽の源流は、出雲系の 榊流神楽で、岩戸神楽に属するものである。山形から名取市高館にある熊野神社に伝わったものを習い、明治 27 年 3 月 21 日に神社庁から神楽免許を頂いた。

震災前の 1 月 1 日には日の出前から準備し、朝 5 時半から 8 時まで神楽を奉納していた。また毎年 5 月の第 3 土・日曜日の嶽宮での大例祭では二日間神楽を舞っていたが震災の影響で境内に入れられない状態のため、現在嶽宮での神楽奉納は行っていない。

里宮である 4 月の神楽奉納は現在も続けており、朝の 10 時からお昼休憩を含めて 3 時までで平均 10 幕～14 幕見られる。また長町の蛸薬師、西多賀の多賀神社にも毎年奉納している。その他イベント等の依頼で年に 8 から 10 回程度他の場所でも舞うことがある。

現在、保存会には大人 11 名（女性 4 人）、神女 2 名が在籍している。保存会では 6 年前から地域の中学校の音楽の時間に神楽の舞やお囃子を教えている。元々学校にあったしの笛とお囃子で使う、しの笛と違うものだったが 2015 年に助成金をもらい実際に使うものと同じ笛 16 本を学校に送るなどの活動もしている。また過去に神楽を見て自らやりたいと言ってきた当時中学 3 年生の男子が 4 人いて、神楽を教えたところ全員熱心に練習を重ね、現在もそのうちの 2 名が神楽を続けている。



写真 2 里宮での例大祭での神楽奉納の様子

2015 年 4 月 19 日撮影 柴田智慧子

第 3 章 太白山の伝承と昔話

本章では、太白山にまつわる伝承と昔話を紹介する。

1 節 太白山誕生（形成）についての伝説

①伝説

昔、茂庭の村にオトアという美しい娘が住んでいた。

ある晩のこと、夜中にオトアが厠に起きたところ、ゴーッという地鳴りのような音が聞こえてきた。オトアは不思議に思って、その音のする方を見たら何と目の前で大きな石や黒い土のかたまりがむくむくと夜の空に向かって盛り上がっているところだった。大きな石や黒い土のかたまりは首でも振るように低い地鳴りをさせながら、どんどん盛り上がって小さな山からだんだん大きな山になっていった。

オトアは吃驚して思わず「あんれえっ、とんがった山になっていくー。」と、大きな声を出してしまった。美しいオトアの声にびっくりした山は、恥ずかしくなったのかむくむく盛り上がっていくのをぴたっとやめてしまった。

ちょうど、オトアに見られた山がむくむく盛り上がっていた時、志田郡の鹿島台の辺りがへこんでしまった。そこが品井沼だということだ。

生出が森は、駿河（静岡県）の富士山と同じころに出来た山なので、このことを聞いた村人たちは「もしもオトアに見られなかったら、富士山よりもっともっと高い山になったのに。」とって残念がったそうだ。

太白山は、一晩のうちに生い出たので「生出が森」と呼ばれるようになった。また、娘の名にちなんで「オトア森」ともいわれている。[相原 1991 : 21]

②昔話 生出が森と亀が森の喧嘩

昔、山里をはさんで、生出が森と亀が森が、背の高さのことで口喧嘩をしていた。亀が森は「おめえよりずっと背が高い」といえば、生出が森も負けずに「そんなことはない、こちらがもっともっと高い」と、お互いにゆずらなかつた。

ある時「じゃ、相撲で勝負しよう」ということになった。いざ、相撲を取ってみると、亀が森の方が強く、生出が森が負けそうになった。生出が森が力をふりしぼりヒジを使って、亀が森の頭を気合い一発「エイ」と落してしまった。里人の話によれば、頭のなくなった亀が森には、それ以来頂上に雪が積もらなくなってしまい、今もその頭が亀が森の麓かもとに落ちているといわれている。一方の生出が森も相撲の時にヒジの部分がでっばってしまい(鈎取方面から見るとでっばっている所)それ以来お互いに喧嘩しなくなったそうである。[「ディスカバーたいはく」編集会議/企画・編 1997 : 11]

オトアの伝説は、様々な文献を見ると多く出てくる伝説である。伝説では一夜にして山が出来上がっていくという不思議な話だ。

物語のようにオトアという娘は美しいとまで設定されているのに、夜に起きた理由が廁だったり、土が隆起して突然山になった時大きな声を出して吃驚したり、物語であるのに現実的な理由で起きてみたり一概に伝説、とは言えないような親近感のある話である。

生出が森と亀が森の山同士のけんかの話はほかの名のある山にもあるようにどこかの山と山が背くらべで喧嘩するという典型的な話だ。

文中にあるように、鉤取側から見ると太白山の片方はなだらかな線を描いているが、片方はポコッと山が出ているようにも見える。このような話は歪な山の形を面白く説明するように作られた話なのかと思える話である。

2節 蛇に関する伝説

①蛇の恩返し

昔、太白山の麓の村に弥助という若者が住んでいた。弥助は、年取った父親と母親の三人で暮らしていたが、父親の吾作は体が弱く、田畑の野良仕事は弥助と腰が少し曲がりかかった母親のお峯の二人に任せていた。

ぽかぽか陽気の春の日のことだった。吾作は何時ものように家で留守番役、弥助はお峯と一緒に畑を耕す仕事に出かけた。

途中、生出が森の八幡様にお参りしてから山裾の畑に向かった。ところが、山道の少し向こうに気味の悪い太い縄のようなものが横たわっているのが見えた。弥助は「おっかあ、あれ何だべや。」と指差しながら母親のお峯に言った。お峯は腰を伸ばしながら「何だべ、あれは縄ではねえなあ。」と目をぱちくりさせながら、その側に行こうとした。与助は「おっかあ行ぐな。俺、見て来っから。」と言って、山道に横たわっている君の悪い縄のようなものの側に行き思わず吃驚してしまった。

それは何と、岩石（いわいし）に頭を潰された大きな蛇だった。弥助は大きな声で「おっかあ。大っきな蝮が死んでいる。」と言って、蝮の頭を潰した岩石を取り除いた。お峯は小走りに弥助の側に来て「何、蝮だって。あれまあ可哀相に。こんなに太い蝮だから、きっとお山の主でねえべがや。」と言って、岩石の落ちて来た山肌を見上げながら山道に座りこん可哀相な蝮に手を合わせた。弥助は「こんなにも大っきな蝮だから、やっぱりお山の主でだべなあ。」と言って、手にしていた鍬で道端に穴を掘始めた。弥助は、太い腹の尻尾を掴んで穴の中にそっと入れ土をかけて埋めてやった。その上に蝮の頭を潰した岩石を乗せ蝮の墓にした。弥助とお峯は哀れな蝮の墓に手を合わせた。その場を立ち去ろうとして二人は岩石を落した山肌を見上げたら、小さな蛇が二匹鎌

首をもちあげて二人の様子をじっと見ていたような気がした。弥助とお峯は蝮の供養をしたような気分になって畑に急いで向かった。

しばらく行くと二度吃驚、今度は蛇が木の枝に首が挟まれてぶらんぶらんしているのに出会ってしまった。弥助は「今日は、お天気がいいがら蛇も穴がら出てきたんだべ。」と言いながら、弥助はその木に登って蛇を助けてやった。助けられた蛇はさっと草叢の中に潜り込んでしまった。

弥助とお峯は、二度も蛇と出会って妙な気持になったが、それを忘れるかのように鋤に力を入れて畑を耕した。

ある晩のことだった。弥助は不思議な夢を見た。それは弥助が山道を歩いていたら、誰かが後ろから追いかけてくるような気配がしたので後ろを振り向くとすぐ側に、蛇が大きな口を開けぺろぺろ舌を出しながら追いかけて、弥助の足に咬みつきそうになった。弥助は蛇に咬みつかれては大変と必死になって逃げた。しかし、弥助はその蛇にとうとう足をがぶっと咬みつかれてしまったところで目が醒めてしまった。弥助は、変な夢を見たなと思いながら天井に目をやると梁にぶらりと蛇がぶら下がっていたので、思わず「おっかあ、蛇だあ。」と言って、土間から鎌と棒を持って来て蛇を追っ払ってやろうと思った。そこへ、吾作とお峯がやってきて天井を見上げた。弥助は持ってきた棒に鎌の柄を結びつけて蛇を退治しようと鎌の先を近付けた途端、蛇はぼたりと居間に落ちて動かなかった。蛇は小さな蝮だった。三人は吃驚して顔を見合わせてしまった。お峯は「何かに入れて始末しなければなんねえ。」と行って、部屋の中を見渡した。しかし、蛇を入れるような物は何も無かった。弥助は土間から焼酎の入った徳利を持って来た。吾作は「蝮ば徳利の中さ入れろ。」と言った。弥助は囲炉裏の火箸で動かなくなった蝮の首を挟んで尻尾から徳利の口に入れようとしたら、蝮は少し動き出したので、吾作にも手伝って貰いやっと徳利の中に入れ口を塞いだ。弥助は徳利の中で蝮が動いているように感じた。そして、弥助は吾作にこの間の蛇のことを話した。吾作は「この蛇は、岩石に頭を潰された蝮の主の使いだかも知れねえなあ。」と言って、徳利から出そうとした。お峯は「お前さん、焼酎に入れたんだから、もう駄目でねえの。」と言った。吾作は「そうだなあ。可哀相なことをしてしまったなあ。」と目をとじた。弥助は蝮の入った徳利を神棚に供えて置いた。三人は毎朝、神棚の供えて置いた蝮の徳利を拝んだ。

それからしばらく経って、吾作は蝮酒が不老長寿の妙薬であることを知っていたので、このことを弥助とお峯に話した。「そうだってねえ。何でも隣村の猟師は、陸の鰻だと言って蛇の皮を剥いて焼いて食べたり、効果てきめんだと言ってぴくぴく動いて

いる生の心臓をそのまま食べるんだって。」とお峯は一気に話した。弥助は蝮に咬まれたら、身体中に毒がまわって死んでしまうことや蝮酒のことも幾らか知っていたが、体の弱い吾作に蝮酒を飲むと言われて、どうしたらよいものかと迷ってしまった。吾作は、岩石で頭を潰された蝮のことや木の枝にぶらぶらしていた蛇を助けたことを思い出して「この蝮酒は、蛇の恩返しかも知れないなあ。」と思った。

弥助は、吾作に向かって「蛇の恩返しだかも知れねえがら、蝮酒ば少しずつ飲んでみたらどうがなあ。」と言ったら、吾作は「うん。」と言って、早速神棚の徳利を拝んでから徳利の口を開け蝮酒を小さな盃でちびりちびりと飲み始めた。弥助は吾作の眼元がほんの少し赤みを帯びて来たように見えた。次の日から蝮酒を少しずつ飲んだ吾作の体はだんだんと効き目が現れてきたのか丈夫な体になった。弥助は「これは、本当に蛇の恩返しに違いねえ。」と思うようになった。

それから吾作夫婦と弥助は、毎日欠かさず生出が森の八幡様にお参りをした。蝮酒に助けられた吾作と弥助は、太白山に棲んでいる蝮を捕まえたりしなかったそうだ。

[相原 1991 : 27 f]

②蛇の脱けがら

昔、茂庭の村に作造と女房の八重やえが百姓をして暮らしていた。八重はとても働き者で朝から晩まで作造と一緒に田や畑の仕事に精を出していた。八重の一日は、まだ夜の明けない薄暗い生出森八幡神社のお参りから始まった。これは、八重が作造の嫁御になってからもずっと続いていた。

子供にも恵まれた八重は誰にも話さない悩みごとが一つあった。それは何時のころからか自分の手にみず疣いぼが沢山出ていることだった。初めのうちはぽつんと一つだったのが三つ四つとだんだん増えていくので自分ひとりで悩んでいた。家にあった越中富士の薬をこっそりつけてみてもなかなか治らなかった。そんな八重が一番困ったのは家にお客が来てお茶を出すのがとても苦労だった。それからの八重はいつも外の人に見られているような気がして着物の袖で手を隠すようになってしまった。

そんなある日、八重は作造にこのことを話したら、作造は「そんなごとあんまり気にすんな。どうしても気になんたら長町宿のお薬師さんに願でもかけたら。」と言われた。

その時、八重はふとお生出森のお八幡さまにお参りしてお願いすることを思いついた。次の朝から八重は、お八幡さまに手のみず疣いぼが治るように一心に祈った。しかし、毎日毎日拝んでみてもみず疣いぼは治らなかった。

ある晩のこと八重は夢を見た。それは八重が蛇を素手で捕まえている変な夢だった。八重はその蛇は蝮のように思えた。八重は嫁御に来たとき、生出が森には昔から蝮が棲んでいる処で、もしも蝮に噛まれたら大変なことだと村の人たちが話していたことを思いだしていた。でも、八重には長い間お八幡さまにお参りに行って、一度だってそうした蝮に出会ったことがなかった。

次の日、八重はいつものように山道を登って、お八幡さまにお参りしようとして拝殿の床を見たら白っぽい紐のようなものが落ちていた。なんだべと思ってがよく見ると、それは蛇のぬけがらだった。八重は恐る恐る拾い上げながら、昨夜の夢を思い出していた。

八重はそれを両手でしっかり握りしめて家に帰って神棚に供えて置いた。ところが二、三日して、八重に驚いたことがおこった。それは、八重の手のみず疣いぼが治りかけてきたように思えたからだ。

八重はどうして手のみず疣いぼが治りかけてきたのか不思議でたまらなかった。やがて「お八幡さまのご利益は、蛇のぬけがらだ」と気がついて、神棚に供えて置いた蛇のぬけがらを押し戴いて手のみず疣いぼを擦った。また何日かして蛇のぬけがらの効き目が現れてきた。あんなに悩んだ手のみず疣いぼはだんだん消えていった。それから八重は毎日蛇のぬけがらのことを村の人たちに話しをした。すると村の人たちは「八重さんは、お八幡さまを信心したから治ったんだっちゃ、蝮は神様のお使者で、お山を荒らす者を懲らしめる番人だべな。」などと語り合っていた。

その後、八重は蛇のぬけがらを財布に入れて肌身話さず後生大事に持っていたらお金に不自由しない暮らしが出来るようになったそうだ。[相原 1991 : 29 f]

蛇がかかわる話はこの二つである。この二つには類似点が複数ある。

「蛇の恩返し」の親子と「蛇の抜けがら」の八重は、生出八幡神社にお参りをしてから仕事を始めるとことである。特に八重は毎日、生出八幡神社にお参りに来ていたことから、信仰心の強さが見れる。

次に、弥助と八重は蛇（蝮、蝮のような）の夢を見て、夢の中で蛇と身体的接触があるということが類似している。しかし、二つの間には大きな違いがある事もまた事実である、弥助の夢では、弥助は大きく口を開ける蛇に追いかけて逃げた夢であった、最終的には弥助は足を蛇に咬まれてしまうが、これだけ見れば消して蛇と関わり身体的接触を持つことが自発的ではないことが見受けられる。

八重の夢は蛇を素手で捕まえているという夢だった。この夢では最初から八重自身

が蛇との接触を、自発的ではないにしても持っており、また与作とは異なり、病が治る八重自身が蛇の夢を見て、治る部位が蛇と接触しているところが、大きな違いである。

弥助一家と八重に共通しているのは、蛇に関係しているもの（蛇の焼酎、蛇の抜け殻）を神棚に供えて拝むこと、毎日少しずつ飲むもしくは触れることで病の症状が少しずつ無くなり、最終的には病が消えてなくなるところ、その後生出森八幡神社にお供えやお参りをすることがあげられる。

この二つの話から、蛇や生出八幡神社への信仰、蛇が出てくる夢や蛇に関わるモノを使う等いくつかの類似点から、この二つの物語は生出八幡神社の神が大きく関わることが分かる。

3節 独活に関する伝説

①片目（メッコ）の神様

独活^{うどくわ}が森の神様は片目（メッコ）だという話が伝わっている。

ある時、神様は山の中を歩いていて、誤って独活^{うどくわ}の枯れ茎で目をつついてしまい、そのために片目が見えなくなってしまった。

麓の茂庭や梨野では「独活^{うどくわ}を食べてはいけない」とされ、畑にも独活は作ってはいけない。神様と同じように独活^{うどくわ}の枯れ茎で片目になることを恐れたのか、あるいは神様を敬ってそのようにしたのかも知れない。

また一説には、独活^{うどくわ}は神様の化身だから、独活^{うどくわ}を食べたり畑に植えたりしては駄目だといわれている。[相原 1991 : 21]

②生出が森と独活の大木

昔、生出が森に独活^{うどくわ}の大木が茂っていた。

独活の大木は、とても大きくてその枝葉が四里四方に広がって、麓の村々ではお天道様の光が当たらないので田畑の作物は実らなくなってしまった。

村人は、大変困って相談した結果、この独活^{うどくわ}の大木を切り倒すことにした。次の日大勢の村人が斧を手早く大木を切り倒そうとしたが、夕方になっても切り倒すことが出来なかった。

次の日に切り倒すことにして、次の朝に言ってみると不思議なことに、なんと昨日切ったところがその日の切り層が集まって一晩ですっかり元通りになっていた。昨日切った筈の木の切り層は一つも落ちていなかった。そこで、また切り倒しにかかった

が、その日に夕方になっても、やっぱり切り倒すことが出来なかった。

次の日も、そのまた次の日も、何度繰り返しても切り倒すことが出来ないので、村人は村の長老に尋ねたところ「^{うど}独活は神様の化身だから、生出が森の天辺に貴船神社を祀ればよい」と教えられて、大同二年（八〇七年）の八月、京都から貴船神社の分霊を移して祀った。村人は三昼夜祈願して、やっと^{うど}独活の大木を切り倒すことが出来たという。

その時、^{うど}独活の幹が南側を流れている名取川の水底に沈んで埋もれ木になったそうだ。

村人は生出が森の麓に、切り倒した独活の大木の精を慰めるために「大木山雲道寺」を建てて供養したが、現在その寺はない。いま、山頂にある石宮は貴船神社の祠である。

また、文治五年（一一八九年）源頼朝が藤原泰衡を攻め滅ぼすために源氏の守護神である鎌倉の鶴岡八幡宮の分霊を移した。頼朝は、自分の兜の蓮花座に飾っていた源氏の氏神正八幡の神像を作らせてその後身体を生出森の山頂に祀った。これが生出が森八幡神社である。

ところが、山は怒り狂い、悪い天候が続いたために、農作物は不作になり村人は途方にくれてしまった。村人たちは口々に「これはきっと、貴船神社の祟りだ。先に祀った神様を粗末にしたからだ。」というようになった。

そこで、山頂にあった八幡神社の祠を生出が森の山腹に移して祀ったところ、これまでの悪い天候が嘘のように治まったそうである。

寛永（一六二四～）のころ、山そのものを総称した生出森八幡神社を嶽宮とし、さらに元禄（一六八八～）になって拝殿（里宮）を生出に移している。

生出森八幡神社の祭礼は毎年大陰暦四月二十日を祭日としていた。それを明治二十二年から三月十五日に改めた。現在、里宮は毎年四月二十日に行われているが名取川で禊をする勇壮な神輿渡御は祭りの圧巻である。嶽宮の祭りは旧暦の四月二十日に行われている。[相原 1991 : 23]

独活に関する話はこの二つになる。話によると、貴船神社が来る前から独活は神様の化身とされてきていることから、神社などの神仏的なものの来るずっと前から、太白山には神様がいてその神様は独活に宿っているという考えがあったことが分かる。しかし、長老からの言葉で独活は神様の化身だから、分霊を持って来ようという考えに至らないあたり当時から伝承や昔話といった民間信仰は伝わってなかったのかと感じるが、この話からだけでは確定できない。

4節 太白山の大男

①太白山の大男

昔、太白山に大男が住んでいた。

いつも山のとっぺんにある敷石という大きな岩にどっかりと腰をかけ、右足は一理程南東にある名取の高館山（名取市）の麓の吉田部落の田圃の中におろし、左足は海岸に近い部落におろして、海から魚や貝を取って食べていた。食べた時の貝殻は茂庭の岩の川に捨てたので今でも貝塚のような厚い層になっている。

時々、大男は大きな足で麓の村におりてくるが、首は雲の上に突き出しているの、村人たちには顔が見えない。ただ太い二本の柱がノッシノッシと歩いてくるのを見るだけだったという。

この大男、それでも性格は優しく、麓の村人が田畑の仕事で忙しい時には、村におりてきてよく手伝いをしてくれたそう。

太白山の南東を流れている洗沢は、大男が汚れた手足を洗ったところだと語り伝えられている。

名取の吉田部落には、大男の右足の跡だという長さ三尺程の足跡のついた石が田圃の中に残っている。[相原 1991 : 21]

大男の話は、太白山にある貝殻や、貝塚の話に深く関係している。大男が村の田畑の仕事を手伝ったとか、大男が使った川など大男がいた証言や痕跡があるが、実際に当時としては大きい人がいたのか、貝がらや貝塚がどうしても太白山や茂庭にあるのか分からない。

5節 生出が森の狐

①生出が森の狐

昔、生出が森に化けかたの下手な狐が棲んでいた。この狐、人にうまく化けられないのは毛並みのいい太い尻尾が隠せないからだった。時々、村にやって来ては人に化ける修行をしていた。

稲穂が黄金色に輝き始めたころ、狐が村里にやって来た。見ると作兵衛どごの赤ん坊が「ぎあぎあ」と泣いていた。狐は作兵衛の家に入って行った。狐を見つけた作兵衛とおっかあは狐の後ろからこっそり家に入って隣の部屋から狐の様子を見ていた。すると、狐は赤ん坊の顔を見ながら太い尻尾を出した作兵衛どごのおっかあに化けて

「こーん、こん、こん。こーん、こん、こん。」と子守唄みている鳴き声をしてあやし始めた。作兵衛どごの赤ん坊は、おっかあだと思ったのかすやすやと眠ってしまった。それを見ていた作兵衛とおっかあは、ほっとして狐に向かって思わず手を合わせてしまった。

狐は、赤ん坊をうまく眠らせたので少し得意になって隣の仁助の家の方を見たら、庭先で豆がらを盛んに蹴散らしている鶏がいた。狐は「今度は鶏を追っ払うぞ」と思って仁助の家のわらす（子供）に化けて「こーん、こーん、こっ、こっ、こっ。」と、鶏みたいに鳴いて鶏ば追っ払っていた。仁助どごのわらすに化けてもやっぱり太い尻尾は出たままだった。

これを見ていた仁助は「俺が家に居ない時にいつもこんなことをやってくれてんのかやっぱり生出が森に棲んでいる狐は神様みていに偉いもんだ。有り難いことじゃ。」と感心してしまった。

それから何日か経ったある日のこと狐が村にやって来た。すると作兵衛と仁助がこの間の狐のことを村人に話しているところだった。狐はうれしくなった。しかし、村人の中には「俺は、本気にしねえ。この間酒飲んで家さ帰る途中狐にワラづとに入れた魚ば取り上げられた。」とか「馬を引いて帰る途中、狐に家さ着いだと馬鹿にされて、道端の肥溜めの風呂さ入れられた。」などと、狐に騙されたことばかりで評価はあまり良くなかった。これを聞いた狐はがっかりして、仲間の掟を破った悪い悪戯狐だなど思いながら生出が森の棲みかに帰って行った。

ある晩方のことだった。狐は少し暗くなりかけた茂庭へ行って見た。仕事帰りの若者が酒屋で一杯飲んでいい機嫌になっていた。狐は「あれは隣村の孝助だな。孝助には年寄りのおっかあが居たな。そうだ、今夜は孝助のおっかあに化けてみよう。」とあって若者を見ていた。

酔っぱらった孝助は、おっかあに食べさせる料理を作って貰い、生出が森の山裾の道を通って我が家に向かって帰って行った。ところが、孝助は何時も通っている道があるのになかなか我が家につかないのだ。孝助はこれは可笑しいなど思いながら、おっかあに食べさせる料理を片手によろよろよろけながらも急いで我が家に向かった。

そのうちに、孝助はさっき通った道をまた歩いていることに気がついた。孝助はふらふらしながらも「ははあ、これは村で噂の狐だな。ようし騙されないで騙してやるぞ。」とあってわざと大きい声で「おっかあ、此処の狐は本当に化けんのがや。おっかあ、早く提灯持って来て見ろや。」といった。そうしたら、辺りが少し薄暗くなった向

こうの方から孝助によく似た若いおっかあが小さな灯りば持ってすたすたと走って来た。孝助は吃驚しながらもやっぱり狐の奴だなと思った。またおっかい声で「おっかあ、そこから俺の顔見えだがや。」と言った。孝助は側に来た若いおっかあに「やっぱり暗いから俺の顔見えねがったべえ。おっかあ、この料理、茂庭で買って来た早く食べるや。」と言って料理を渡そうとした。すると狐が化けたおっかあはきよとんとした顔をしていた。茂庭を鬼と聞き間違えたのか「これは鬼（茂庭）の作った料理だって？おっかあは食わねえ。」と言って、手を引っ込めてしまった。孝助は、またわざと「おっかあ、鬼の料理だ早く食べるや。」と言った。すると狐が化けたおっかあ頭ば横さ振って下ば向いてしまった。

孝助は、狐が化けたおっかあの着物の裾を見たら風もないのになんとか動いているような気がした。孝助は、これはきっと生出が森の狐に違いねえと思った。

何時も村人の手助けをしている狐を脅かしているのが何だか可哀相になって「鬼でねえ茂庭の料理だから食べるや。」と言って、おっかあの手は無理やり渡した。孝助とおっかあに化けた狐は、鬼が作った料理だと思い込んで怖くなったのか、尻尾の太い狐の姿になって「こーん、こん、こん。」と鳴いて生出が森の方へ逃げて行ってしまった。酒を飲んで酔っ払っていた孝助は、もうすっかり酔いが醒めてしまった。

孝助が我が家に帰って見ると、年寄りのおっかあは囲炉裏の裏側で晩ご飯のお膳の用意をして息子の帰りを待っていた。孝助はお(ママ)の狐はきっと俺の帰り道を心配して後ろから追っかけて来たのだと思った。

生出が森の狐は、それから時々村にやって来て化け方の修業を続けたけれども、毛並みのいい尻尾はやっぱり隠せなかったそうだ。[相原 1991 : 25 f]

動物の話は、この狐の話のみである。よくある狐に化かされた話であるが、この話の狐は、いい狐として書かれていて、人間に害はなくただ化ける修業のために村におりてきて、いいことをする。だから尻尾が見えていてもあえて村人も何も言わずにいる、また狐も仲間の掟という狐の間での決まりを作って人間の迷惑をかけないようにしているように感じる。

この話は、動物（化かす方）と人間（化かされる方）がお互い歩み寄って生きていることが見える話だ。

6 節昔話 殿様と太白山

①殿様と太白山

昔、江戸城で東北の南部、津軽、佐竹、伊達の殿様たちが国元のお山自慢をしていたそうだ。はじめに南部の殿様は「南部には、城の真西に岩手山が見え、南部富士といわれる美しい山がござる。」という、隣に座っていた津軽の殿様は「津軽にも津軽富士と呼ぶ岩木山がござる。津軽富士に登れば海の向こうの蝦夷地まで見えますぞ。」と、胸を張った。すると、佐竹の殿様は「津軽殿の岩木山は、蝦夷地までしか見えませぬか、わが国元には出羽富士の鳥海山がござる。鳥海山からは蝦夷地ばかりでなく、遠くオロシャまで見えますぞ。」と自慢した。

殿様たちのお山自慢を黙って聞いていた伊達の殿様はにこにこ笑いながら「国元には伊達富士はござらぬが、仙台の城の真西に面白い形をした山が見えます。何でもこの山は一晚で生まれた不思議な山で生出が森といわれ、駿河の富士山と同じころに出来た山だということござる。近くの海の何処からも見えるので漁師は船の目印にしているということじゃ。それに、この山の麓の領民はお山にかかる雲の様子を見て農作業をしているという話を聞いている。この山に登っても蝦夷地やオロシャは見えぬが、伊達六十二万石の自慢の山でござる。南部殿、国元にお帰りのおりに奥州街道の中田の宿を過ぎると名取川の西に見える山でござる。ぜひ見て下され。」と話されたそうだ。

伊達の謙虚な話を聞いてほかの殿様たちは「さすが名君、伊達殿でござる。」と褒め称えたという話である。

この不思議な山のことを城下町の人々は「太白山」と呼び、名取に住む人たちは「名取富士」とか「生出が森」と呼んでいる。[相原 1991 : 24]

殿様の話には太白山という名前自体は出てきていないが、太白山が領地でどれほど有名な山だったかが見て取れる。各地の有名な山々が自慢される中、伊達の殿様は胸を張って太白山を自慢していることや城下町や名取の人たちから、身近にある自慢の山だということが分かる。

その一方で、駿河の富士と同じころに出来た山だとお殿様が言っていたのは、オトアの話にあるエピソードだが、そのことは仙台に伝わるほど、もしくは書物などに残っていた話なのか疑問に思う。

第4章 近年の変化—聞き取り調査から

1節 聞き取り調査の概要

太白山に纏わる、伝承や昔話が現在どのように伝えられ、地域の生活や暮らしの中

に根付いているのかを知るため、民話が多く残っている茂庭に住む方々にインタビュー調査をする。

伝承や昔話、また比較対象とする生出森八幡神社神楽に詳しい人たちから聞き取り調査を行い、現代において民間伝承されているものがどのように伝えられているか、地域にどのように伝わっているのかを地域に住み、伝承に関わる人たちに聞くことで実際にどのように伝わっているのか、生活に関わってきているのかが分かる。

インタビュー調査には、茂庭に住み伝承や昔話に詳しいと思う方を中心に話を聞きたいと思った。一番最初に生出八幡神社神楽の方が思い浮かんだ、生出八幡神社は太白山伝承の中にいくつか出てくるほど関係が深い神社であり、そこからできた神楽に所属している方なら伝承や昔話にも詳しいのではないかと考えた。神楽の人に話を聞くにあたって、10・BOXの八巻さんをお願いして紹介してもらった、そのおかげで神楽の方にスムーズに聞き取りを行うことが出来た。

また、神楽との比較と震災前の祭りの様子を知るために祭りについて詳しい人にインタビューしたいと思った。村の時に生出市民センターの方に祭りに詳しい方を紹介していただき、資料の貸し出しの他に軽い聞き取りもさせていただいた。

2節 聞き取り 1

日時：10月30日（金） 13時20分～17時10分

聞き取り相手：嶺 栄松さん

66歳 茂庭出身

生出森八幡神社 神楽長神楽師

Mさんは生出森八幡神社神楽の神楽長さんということで、まずは生出森八幡神楽について話を聞いた。

1. 生出森八幡神社付属神楽の特徴は何ですか？

出雲の榊流^{だい}大神楽で神楽自体は800年以上のもので、生出には山形から熊野神社に伝わったものを習得した。ここ（生出）に来たのが明治27年だから約100年ほどたっている。神社庁から神楽免許をもらったのが明治27年3月21日。

神楽は神のための神楽であって、人に見せるものではない、祈祷の舞。黙劇と言われるが、「劇」ではなく「舞」という。

神楽についての歴史を詳しく聞いた。「劇」ではなく「舞」だと言われたときに、神楽だということに、誇りを持って行われているんだと感じた。この時、宮司さんが

読む特別な祝詞を見せていただいた。

2. 元旦や大例祭などで、何時間でどれぐらいの演目をしますか？
3. 震災前と震災後で例祭や神楽の奉納などで変化はありますか？

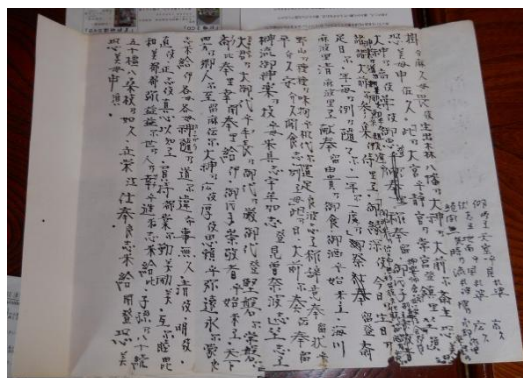


写真3 特別な祝詞

2015年10月30日撮影 柴田智慧子

祭りは震災前、新暦と旧暦で里宮（仮宮）と嶽宮（^{だけみや}本宮）と年2回行われていた。15～20年前は農家の人も多く平日や休日などなかったので、祭りの日は変えずに行っていた。祭りは神様の日。

里宮では新暦に祭りを行う。内容は1日目に神輿渡御。2日目は神楽奉納。神輿は神様を乗せて、嶽宮まで行き、地域を回り名取川に行き里宮でお返りする。2日目の神楽ではなるべく14幕全てするには心がけているが、メンバーの関係などで、平均10幕前後行う、時間は朝10時～午後3時ぐらいまで行う、途中40分ほどお昼休憩をはさむ。

嶽宮では現在、旧暦で祭りを行っていたが、現在祭りと元旦の神楽奉納は休止している。震災までの祭りは2日間お神楽を舞い、本宮ではご祈祷や宮司さんがお祓いをしていた。元旦には日の出の時間帯に合わせて神楽を始めるので、暗い時間から準備して朝5時半～8時までかがり火をつけながら6～7幕を舞っていた。現在は休止中だが境内を直してから神事や神楽を再開する。

他にも神楽が始まった時から西多賀の多賀神社と長町の蛸薬師から神楽の依頼があり、現在まで欠かさずに行っている。またその他の場所での奉納や披露も依頼があれば随時、年に8～10回年に行う。演目はイベントなどの内容に沿ったものを。

練習期間は祭り前は1ヶ月前から毎晩行い、それ以外は月1回第三土曜日に練習する。以来があれば本番の一週間前から毎日練習する。

5月には嶽宮で祭りをやると調査前から知っていたため昨年と今年、太白山まで上ったのだが、嶽宮での神楽は見れなかった。また事前に生出森八幡神社神楽のホームページで元旦にも神楽を奉納していると書かれていたので伺ってみた。しかし震災後

は嶽宮の方での奉納は行われていないという。嶽宮の境内への道がいまだに震災直後の崩れたままのため、見に来た方の安全を考えて、今は休止という形をとっている。

イベント出演の話が出たとき、数週間前にれきみん秋祭りに出演されていたことも少しお話していただき、「あのイベントには最初の方から出てるんだ」ということと当時のチラシを見せていただいた。

4. 太白山についての昔話や伝承で知っているものを教えてください。

おとわの話、独活の大木、大男の話

5. 子供のころ誰かから聞いた話があれば、誰からどんな内容でしたか？

オトワが夜廁に行つて帰る途中で山が盛り上がるのを見て大声を出したら山が

大きくなるのをやめたからオトワ森と呼ばれる話。独活の大木と、太白山に大男がいて、

太平洋から貝をとつて太白山に腰かけて食べてたとかは知っている。

子供のころは祖父母から夜に笛吹くと蛇がでるとか、そうゆう話なら聞いた。

6. 昔話などから昔から地域に伝わる生活の習慣や言い伝えなどありますか？

そうゆうのはないかな……。

独活の話もあるけど、太白山に行つてもウドを見たことがないから、本当の話なのかもわかんないし……。改めて聞くこともない。

太白山の昔話について話を聞いてみるとあまり、聞いたことがないと言われた。それでも何個かないかと聞いてみるとオトワの山の誕生の話が一番初めに挙がり、やはり地域の人にとってはオトワの話が一番メジャーなのかと感じた。他には独活の大木が大きくて農民が困つた話、大男が山にいて海の貝を食べていたから貝塚があるという話は話してくれた。

7. 最近の小学生や中学生は太白山の昔話などは知っているのでしょうか？

子供たちはいくつかは知っているとは思つけど、太白山からは離れつつある。茂庭中学では、昔太白山の清掃の日があつてごみ拾いに行く日があつたが、今は危険だからやつていない。また近くの近くにあるやまびこ幼稚園の子供たちなんかは山を登つたり、昔平日に嶽宮で祭りをやつた時は神楽を見に来たりもしていた。

昔話などは、話してくれる語り部の人が、自分（嶺さん）のときにも居なかったから、改めて聞く機会がない。

神楽保存会には神子が二人所属していることと、Mさんは中学校でも神楽を教えているので知っているかとも思った。しかしそれ以前に話を聞くと、Mさんの話からすると伝承や昔話はあまり伝わっていないようで、Mさんの子供の時からあまり話を聞くことがないと聞き、地域に民話はそれほど伝わっていないという印象を受けた。

3 節 聞き取り 2

日時：11月6日（金） 14時20分～16時00分

聞き取り相手：吉野紀行さん

75歳

太白山ふれあいの森協力会 会長

太白山のお祭りに詳しい方ということで生出市民センターの方から紹介していただいた吉野さんからは、昔の太白山で行われていた祭りについても詳しく伺うことができた。

1. 太白山ふれあいの森について

平成10年4月吉日から現在まで続く組織。地権者で成り立っている。

活動内容は太白山を市民に開放・管理を行っている。環境の整備やゴミ拾い、桜の苗や紅葉を植樹したりしている。

7から8年前まではゴミや粗大ごみが多くあったが、組織が発足してからはだんだんなくなっていった。

太白山に関する組織については調べ不足でふれあいの会についてどんな活動を行っているのかわからなかったのでお話しいただいた。管理している人がいることは知っていたが、正式な組織があることは知らなかったなので、活動内容などを改めてお話しいただいた。

2. 太白山の祭りについて

長町から太白山まで最高で4両の電鉄が出ていて、子供のころは、小遣いをもって祭りに行ったし、それに乗ってとにかくいっぱいの人に来ていた。茂庭から山を登ると1時間ぐらいだった、電鉄だと宮まで30分、駐車場まで40分ぐら

来ていたという電鉄の効果もあるだろうが、今よりも山と人との距離が近かったのではないかと感じた。また今では考えられないほど遠くの方からくる人が多かったというのもそう感じられる一つかもしれない。海の人が札をもらいに来ていたという話から生出森八幡神社が貴船神社の分の役割を果たしているようにも思われる。

傷痕軍人の話は実際には見たことがなく、また初めて聞く話だったが、わざわざ山を登ってまで来たということはやはりそれほどの賑わいがあったということだろう。10数年前に祭りに行ったという人からも少し話を聞いたが、その時も人が多かったと言っていたので震災前まではにぎわっていたと予想される。

またラジオを持ってきていた人がいたということは、裕福な人も来ていたということである。何を目的に来ていたのかは定かではないが、裕福な人が来るほど大規模な祭りであったことが分かる。

里宮の祭りは、最後の名取川での清めの儀式が少し変わっているだけで基本的は変わっていないようだが、神輿渡御の大事な部分でもあると思うだけに変更してよかったのかと問題になっているのかと思った。神輿を見る側からすると見どころだが、川に入る担ぎ手が危険だから安全にということだろうから難しい問題だと感じた。

4. 太白山についての昔話や伝承で知っているものを教えてください。

あんまりわかんないかな、聞いたこともないし。

伊達家の殿様が、狩場にされていて、太白山の中間の宮のあたりに見晴らし台があったらしい。

旗立の地域は源頼朝が凱旋してあの地域に旗を立てたから「旗立」って名前になってっていうのは昔からの言い伝えだよ。

5. 子供のころ誰かから聞いた話があれば、誰からどんな内容でしたか？

頼朝の話とか、誰かからってはっきりとは言えないけど、噂話みたいに誰かから聞いてそれを皆が知ってるって感じ。

お母さんとかおばあちゃんからも聞かなかつたし。

6. 昔話などから昔から地域に伝わる生活の習慣や言い伝えなどありますか？

太白山は頂上に貴船神社があるでしょ？だから雨乞いの山だったんじゃないかと思うんだよね、どこの山も雨乞いとかそんな感じだから。

伝承や昔話を聞いてみるとやはりあまり出てこないようで、あまり知っているお話も少なく、また身近な大人から聞くというのもなかったようだ。子供のころの誰かか

ら聞いた噂話のような伝説は聞けたがそれも数少なく、太白山に関する伝承はやはり長く地域に住んでいる方にもそれほど浸透していないことが分かった。

結論

太白山に関する伝承や昔話は複数あり、資料上はその存在を確認できる。しかし、生活をしている人々の間に伝わっているものは少なく、また生出八幡神社の里宮がある茂庭にすらあまり伝わっていない様子だった。他の人々と比べて物語をよく知っているのではないかと推測される、長年茂庭に生まれながら住んでいる方や、市民センターに勤めている方、神楽で神子をやっている子たちに聞いても、一部しか知らなかったりうろ覚えだったりした。また伝承が市民生活に何か影響がないかと考えていたが、今回調べた限りにおいては何もないようだ。

【表 1】太白山における伝説・昔話と神楽の状況の違い

	伝説・昔話	神楽
相違点	あまり広まっていない	現在では市指定無形文化
	内容も詳しく知らない	(人によってだが)知っている
	語り部がない(調査によると一人?)	保存会に10人以上が所属
	語る場が少ない(地域のセンター講座など)	依頼されればどこでも
	伝承者がいない?(詳しい人がいない)	伝承者がいる
	例大祭に関係ない	例大祭に関係深い
	地域の人にしか伝わっていない	地域以外の方が知っている
	保存会がない(?)	保存会がある
類似点	茂庭に関係する(太白山関係)	
	昔から伝わるもの(伝承するもの)	
	あるということは地区の人々が知っている	
	なくなろうとしている(していた)【詳しい人がご高齢】	

太白山における伝説・昔話と神楽の状況の違いをまとめたのが【表 1】である。その一方、同じ民間伝承である生出八幡神社神楽には保存会があり、一時期は途絶えそうになりながらも現在では保存会には十人以上所属している。また仙台市指定無形民俗文化財に指定されている。神楽は毎年春の例大祭や震災前は元旦嶽宮でも神楽を披

露していたため、村の人たちに慣れ親しまれている様子が見て取れた。伝説や昔話と同じように、市民生活に直接関わるということはあまりないが、年に一度の祭りの際に見られる楽しみの一つとなっていたのではないかと考える。

二つを比べてみると大きな違いは、生出森八幡神社の大例祭に関わっているかが関係あるのではないかと思う。

大例祭の際に神楽は、奉納のために里宮と嶽宮で祭りをする際に披露することで、自然と人の目につき注目されることから、興味や関心が湧き自分もやってみたいという意欲に繋がり神楽が次世代まで繋がるという効果もある。また現在では神楽保存会があることから、きちんとした継承が行われ神楽の舞、お囃子全てを身につけることが出来る。

伝承や昔話は、生出森八幡神社に関係がある話もあるものの、大例祭で何かするということがない。生出市民センターで子供たちに向けた地域の伝説を伝える活動をしているが、保存会は存在しない。語り部の役割をするのに向き不向きもあるが、伝承や昔話の人目に触れることが神楽に比べて規模も時間も圧倒的に少ないのが原因ではないかと思う。神楽と同じくらい人々の目に触れれば、興味関心が湧き、次世代に伝えていく活動をしてくれる人がいるのではないかと考える。

伝承や昔話、神楽の資料を集めたり、インタビュー調査をしていて、感じたことは同じ民間に伝わってきた民俗であるのに、人々の注目が圧倒的に神楽に向いているということだ。

生出森八幡神社神楽は仙台市の指定無形文化財になっているからか、地域の人たちによく知られていて、また受け入れられているように感じた。そしてインタビュー調査で分かったように、保存会では地域の学校や市民センターと協力して後世に伝えること、茂庭以外の人へも外部のイベントに参加することで生出森八幡神社神楽を知ってもらうという、舞やお囃子だけでない外へ向けた活動と、後世に残す活動をしている。そのおかげか神楽を行う保存会のメンバーも多く、またイベント出演数も最低でも年8回という数をこなしていて外との繋がりが増え、更に茂庭の人たちが関心を持ち注目するようになっている。

一方、伝承や昔話は仙台市や太白区が発行している伝承に関する冊子や、生出市民センターで作成された『生出物語』のように文章化されているものがある。また生出市民センターでも物語や歴史を知る会などで講座が開かれていたりもする。しかしながらあまり広まっていない。伝承の中には生出森八幡神社が出てくるものや、茂庭が出てくる話もある。それにもかかわらず地域の方に、知っている伝説や昔話は？と聞

くとオトアの話が出てくることが多く、他の話は出てきにくい。神楽と違い口頭や文面でのみの知識なので記憶にも残りにくく、また余程のインパクトがないと忘れてしまうのか、熱心に勉強している方や、伝承や昔話に興味がある人でないと注目することがないのかと思う。

二つを比べると、神楽が有名であり祭事には登場し芸能ということから注目を集める一方で、伝承と昔話は地域に伝わるものとしては知られているものの、自分から知ろうとしなければわからないものであり、披露の場が少ないことが伝承の継続と神楽との違いに関わっているのではないかと考えた。

伝承や昔話がこのまま継承されずに残っている文献や資料からのみ伝えられるというのは、これまで地域に脈々と語り継がれてきたものが文面でしか知られることがなくなるというのは民間伝承という点でも問題ではないかと思う。上記でも紹介したが生出市民センターでは子供たちに向けた地域の伝説を伝える活動をしている。勿論この活動には大人も参加可能で興味があればどなたでも、という活動なので伝承や昔話を聞く、知る機会はあるのだが、地域の市民センターが主催なためなかなか茂庭（生出）以外の方が活動に気づいたり、参加することがない。また参加しても自分のノートやメモなど個人で楽しみ知識を蓄えるのみで、誰かに表だって話すこともないので受講した後に受講者から他の人に伝承や昔話が広まる事もあまりないように思う。ではどうしたら伝承と昔話が文面だけではなく、多くの人に伝わり継承されるようになるか、考えてみた。

比較対象にもなった神楽との違いは例大祭に関係がないというだけではない。今回調べた限りでは生出の伝承や昔話には保存会がない。近くでは秋保に「秋保語りの会」というものがある。この団体は平成 17 年に秋保市民センターで行われた「秋保の民話語り部養成講座」の受講生が発足した団体で、活動内容は昔話を方言を混じえて語るという活動を秋保・里センターというところで毎週第 2・第 4 日曜日に行ったり、11 月には秋保民話まつりというのを毎年開催して、秋保に残る昔話や民話を「秋保語りの会」の方が披露する祭りがある。そのほかにも地元の幼稚園や小学校などへ出向き、方言を交えた語り口で民話を伝える活動をしている。もっと大きい団体では「みやぎ民話の会」がある。この団体は県内の民話の伝承者である語り手の方が訪問し、聞きとり、音声資料・文字資料として記録することを目的にしている団体である。またこの会はその他にも民話についての勉強会やみやぎ民話の学校というイベントを行い毎年県内の町で三日間民話を語る場を作るという活動をしている。この二つの会のように生出にも伝承や昔話を勉強したり継承者を育成するための組織があればいいの

ではないかと思う。

さらに、地域独自の伝承や昔話が伝わっている所は県内に秋保以外にも複数あるので、語り部が集まって特定のものやジャンルで集まってどこかで昔話を聞く会などのイベントを企画すれば、民話に興味がある人が会場に来ることもなるので広く広まり、生出の伝承や昔話に興味が出てくる人がいるのではないかと考える。実際に生出森八幡神楽が出演するイベントに参加した際に、「この前のイベントが素晴らしかったので追っかけです」と言っていた方がいたので、イベントに参加することで興味を持ったり、他の地域の方に広まる可能性があるというのを目の当たりしたことがあったため、長く続けていけば効果があると思う。

他にもホームページを作ったり、CDを作ったりと生出森八幡神社神楽保存会の活動を追うようだが、後世に伝えるには茂庭地域以外にも発信していく活動をして、存在を主張しなければならないと思う。ホームページやCDは専門的な知識や機材がないと作成できないが、保存会を作ったり、他の地域とつながりを持ちイベントを企画することは、すぐにでもできることではないかと思う。

消えかけている茂庭に伝わる伝承や昔話をどのように残し、語り部をどう育成していくのがこれからの課題になるのではないかと考える。

参考文献と先行研究リスト

仙台市教育委員会

1984 『仙台市文化分布調査報告Ⅱ仙台市生出地区のまつり』

2009 「生出森八幡神社の祭礼調査報告書」

名取教育会

1925 『名取郡誌』 尚綱その他

宮城縣史編纂委員会編

1954 『宮城縣史 23 資料編 1』

仙台市史編さん室

1998a 『仙台市史 特別編 6 民俗』 「舞い踊る人びと」

1998b 『仙台市史 特別編 6 民俗』 「仙台のまつり」

柳田國男

1955 『新版遠野物語付・遠野物語拾遺』

相原豊治 「太白山の伝承と昔話」 新しいふる里づくり講座「おいで」編集委員会(編)

1991 『おいで』 4号

太白地質案内 1

https://www.gsj.jp/data/chishitsunews/2010_08_17.pdf

鈴木正崇

2015 『山岳信仰』

岩科小一郎

1968 『民俗民芸双書 34 山の民俗』

赤坂憲雄

2009 『東北学/忘れられた東北』

生出まち物語 作成委員会

2013 『^{おいで}生出物語—平成の風土記—』

「ディスカバーたいはく」編集会議/企画・編

1997 『ディスカバーたいはく』 3号

秋保語りの会

http://akiusato.jp/event/event_meisai.aspx?id=23

<http://akiusato.jp/satoblog/?p=4596>

みやぎ民話の会

<http://blog.canpan.info/fukkou/archive/137>